

幼児と愛

ひさ子

私は今日ひとつ、ある良くない幼児に付ての經驗を述べまして、皆様の御矯正を願ひたいと思ひます。

其幼児と申しますのは、只今五年六ヶ月の男児で、極低下等社會の子でございますから、こゝろ風な兒が世間に多くあるのであらう、といふ考から書くのではございません。下等社會にはこゝろ風な兒に育つた兒もある、といふ特別の例として擧げるのでございます。

此兒は日々幼稚園に參りますが、他の普通の幼兒のやうに保母を慕ひません。即ち保母に對して愛情を持ちません、ですから保母が一緒にゐるばうとして、少しも之を喜ばしません。又友達と樂

しく遊ぶといふこともございませぬ。又普通の兒の喜ぶ自然物、例へば草とか花とか、其他恩物とか書本とか、凡ての物をも喜びません。つまり保母をも、友達をも、いろ／＼の物をも、少しも愛しないので、従て心に温かな處が少しもなく誠に冷かで、強情で、亂暴で、意地悪で、そうして人の目を怒んでは、他の幼兒をつねつたり、突き倒したり、打つたり、いたします。そこでそれはいけないうことである、と言てさかさうとしますと、あくまでも、自分はその事をしないとか、忘れましてつたとか言てごまかして、どんな場合にも其惡をかくして其場を逃れやうとします。其時にそれを取り上げないで戒めますと、すぐ聲をかざりに泣き立てまして、なか／＼私の隣などはとも聞えないほど泣きます。其外友達が此兒の足

をつい踏んだとか、知らずに鉢合せをしたとかいふ一寸した場合にでも、ひどく怒りまして、すぐ泣き出します。

そこで私は家庭ではどういふ風であらうかと思ひまして、阿母さんに逢つて、たづねましたところが、其答が次の通なんでございます。

あの子は誠に悪者で困つた者でございます。兄弟中で一番いけません。實に強情で親の言ふことなどは侮つてなかくき、ま心から、或時に、三度同十事を言つてもきかなければ縛る、さいふ約束をいたしましたして、それからさいふものは、大方日に一度位は縄でしばりまして、物置二階にほり上げます。そうするささすがに悲しいものですから聲を限に泣きます。近所の人はきかれて仲裁をして呉れるさいふ有様でございます。又此兒は誠に手が早くて、すぐ人を打つたり倒したりして困ります。こいうふ風にあまり悪いものですから、幼児であるさ思ひながら、腹も立ちまして、我子ながらつひ憎くて、此子のせぬ事までも「之も汝であらう」とさいふ風に叱りたくなります。

そこで私は考へました。此兒が人や物を愛しな

いのは、全く自分が人から愛せられないからである。即ちよく悪いからとは言ひながら、最も温き愛を受くべき母から、時には憎いと思はれるのです。そうして兄弟中の悪者と撞斥せられ、何でもかでも悪い事を言へば皆此兒の所爲かのやうに「汝であらう」と言はれる位なのです。近所の人や幼兒から愛せられる譯はわりません。即ち此兒は誰からも温かな愛を受けないのであります。

それから体罰の濫用、之も實にいろ／＼の悪影響を興へて居ります。即ち度々不自然に強く叱られるといふことが、此兒の反抗心を増してます。強情に導く原因の一となり、又悪行に付て戒められる場合に、ごまかさうとする不正直もつまりしぼられるいやさを記憶して居る所から悪を

かくさうと圖り、又叱られるといへば縛られるやうに思て泣いてかゝるのでありませう。それから友達に對してひどくおこりつばいのは、自分から怒つて叱られる場合が多いから、自然情の激する質になつたのかと思ひます。

それからいつも悪者扱にせられる事、之は幼児自身をして自分は悪者と思はせ、善い事をしようとする心の發達を妨げいよゝゝ悪くなる大原因でございませう。

さてかういふ風でございませうから、私は此兒に付て次のやうにしよう、と考へました。

それは、此兒のいろゝの欠點の基は心が冷かなといふことであらう。まづ此兒の心を温かな愛であたためて、和けてやるといふことは第一着にしなければならぬ、良い事をする機會を與へてや

らなければならぬ、と感じました。つまり此兒が人の愛をうけいれ、進んで他を愛するやうにすれば、いろゝの欠點は自然に少くなると考へたのでございませう。

そこで私は此兒と愛といふことに付て次のやうな順、一、私の愛を受けいゝ事、一、私に對する愛、一、自然物、人造物等凡て人間でない物に對する愛、一、友達に對する愛、といふ風に此兒の心の中のを愛をおしひろめたく望みました。

一、私の愛を受けいゝ事、之はなるべく私に此兒に近づき親みまして、出来るだけの同情を以て取扱ひ、やはらかに接するので、先生は自分を愛して呉れるものである、といふことを悟らせようといふこととめしました。處が此兒今迄やはらかに取扱はれた事がなかつたものですから、私の取扱を

非常に嬉しく感じたと思えまして、段々私の愛を喜んで受けいる、やうになりました。たとへば前には私が手をひかうとしても冷かな疑深い目であとしさりをしたものが、後には進で私と共に遊ぼうと望むやうになりました。つまり追々私を信用し其愛をうけいる、やうになりました。

一、私に對する愛　之は私の愛をうけいる、やうになりましてから自然に湧き出しました。即ち私が此兒を愛して居ることを此兒が知ると同時に此兒は私に對して愛情を持つやうになりました。温かな心で人を愛するといふことの經驗を持たない此兒が私を愛するやうになりましたのは進歩の一段階である、と喜びました。

一、物に對する愛　今度は私に對する愛をかしひろめて、何物をも何人をも愛するやうに他愛

的愛情を發達させようと思ひましたが、それには人に對するよりは、まづ物に對して之を愛する心を起させ、其愛を進めて人に及ばせようと考えました。そこでまづ手近にある植物類からはじめよう、と思ひまして毎日毎日ある一定の時間中、此兒だけを伴ひまして、庭園の靜かな處を散歩しながら木の葉を拾ひ集めました。頃は丁度秋の末でいろ／＼の木の葉が散り敷いてありました。處か此兒はじめには木の葉に付て何の興味をも持ちません。けれども私が自分でいかに面白さうに拾ひ集めて、大事にするものですから、それに誘はれて段々拾ふことが面白くなり、又進で其木の葉を愛するやうになりました。或日私は「先生は此葉を甲さんや乙さんに分けて上ませう」と言ひました。處かしばらくして此兒も「先生私も之

を皆に分けて上ます」と、此人に分けようといふ心、人を思ふ心こゝろいふ心が少しでも起つたのは、他愛、同情といふ方面から考へて眞に喜ぶべきことと考へました。そこで私は此分けてやるといふ事に大に賛成を表し、「そうしませう皆が喜ぶでせうチー」と言ひました。すると「皆は笑ふでせう」と言ひます。私は「エー皆は喜んで笑ふでせう早く歸て上ませうチー」と言ひました。彼は欣然として様々の葉を集めましたから、室に歸つてから、彼の言つた通り、皆に分けました處が、彼は今迄にない愉快そうな顔をして喜んで居りました。

凡てこゝろいふ風に前にさほど愛しなかつた物を愛しはじめると共に、此兒の心は少しづつ和いで參りまして亂暴も減り、意地悪も減り、人を苦める事も少くなりました。

二十四

一、友に對する愛 物に對する愛が段々進ん來ましたから、今度は之を人に及ぼさうといふ考から極愛情の深い温かな心を持つて居る良い兒と此兒とを二人連れて毎日庭を散歩いたしました。そうすると此兒は果して此良い兒をも愛するやうになりましたから、段々數をふやして多くの兒と一緒に連れあるき、遂には特別に連れ歩くことはやめて通常に他の幼兒皆（二十餘人）と一緒に遊ばせて居ります。

此、私が此兒に對し、此兒が私に對し、物に對し、友に對する愛は大に此兒の心を温めました、只今ではよほど扱ひやすい、前に比べて良い兒になつて居ります。尤も前の亂暴、意地悪、腕力沙汰のなごりは今もなほ少しづつ、あらはれますが、それでも根本的に、冷かなといふ處がなくなり、

心が和いで参りましたから誠に喜で居ります。

こんな經驗談を永々と述べまして相済みません  
どうかこういふ幼兒に付ての、皆様の御考や、御  
教を仰ぎたいものと思ひまして書きつけました。

今昔いろいろは料理

石井泰次郎

(その部)

○岡しみの拵へかた

これは精進料理の時にしみの形ちにこしらへた  
る物なり、木耳をあらひて、水につけをき、よき  
所をゆで、木耳一つ、しみの形なるに、中  
へ豆腐をしぼりて播盆にてすりたるを、しみの  
身の如く、箸の先にて一寸入るゝなり、さて汁に  
も吸物にもつかふべし。

又、木耳の中へ、魚のすり身を入れてつかふもあ

り、是は精進にてはなし

○小倉豆腐の拵へかた 又色紙とうふともいふ

淺草海苔を、豆腐のしぼりたるに合せて、播盆に  
てすりませ、次に粗板の上におきて、さしみ庖丁  
刀にて、平らにのして、又かまぼこ板の大きさの  
板の上へ、薄く一面に平らに、さしみ庖丁刀にて  
のしつけて、蒸籠に入れてむすべし、さてむしあげ  
て、十分間ほどむしてよし、水の中へとりて、  
板よりはがして、切形は色紙形に切るべし。

板の上へ、美濃紙をしきて、其上にのすべし、  
多くつくる時は、其のしたる上へ紙をあて、其  
上へまたのすべし、かく三枚ぐらゐしてよし、  
紙は其板の大きさにたちかくべし。

使用法は、茶碗盛 椀盛のなかへ入るゝなり、  
又汁にもよし